社会医学会レター

日本社会医学会　2017-3 号　2018 年 3 月 30 日発行
事務局　滋賀医科大学 社会医学講座 衛生学部門 内
大津市瀬田月輪町 TEL/FAX：077-548-2187/2189
E-mail: office@jssm.mail-box.ne.jp
ホームページ：http://jssm.umin.jp/

第 59 回 日本社会医学会総会 ご案内

メインテーマ
「前を向く社会医学 ～次代への胎動」

日時：2018 年 7 月 21 日（土）～22 日（日）
（理事会は 20 日（金）夕方の予定）

場所：獨協医科大学
（栃木県下都賀郡壬生町北小林 880）

大会長からの挨拶
小橋 元（獨協医科大学 公衆衛生学講座 教授）

本学会は、1960 年に「社会医学に関する理論およびその応用に関する研究が発展助長すること」を目的に社会医学研究会として始まり、今年の総会が通算 59 回目となります。

一昨年は社会医学の役割を憲法理念から見直し、昨年は社会医学の復権がメインテーマとして掲げられ、学会の還暦を前に社会医学の原点「人が人として生きることへの熱い思い」を新たに考える大きなきっかけとなりました。

学会還暦前夜の今回は、それらの成果を踏まえて、これからさらに前を向いて一歩一歩進んでいきたいと強く思います。

国際平和、格差社会、少子高齢化・子育て支援など、解決すべき問題などが山積し、社会が混迷を深める昨今ですが、これから社会医学が果たしていく役割は何かを考え、具体的な取り組みを進めていかねばなりません。そのために、以下の 2 つの「社会医学の基本的なお作法」をあらためて見直してみることとしました。一つは少しでも説得力のあるエビデンスを作るための「疫学」、もう一つは集団のトップを説得しつつ人々を巻き込むための「アドボカシー」です。

今回の総会では、これらの基本的な作法のもとに、「次代の社会を見据えた熱い議論」と「新しい一歩」を目指したいと思います。

また「次代の社会医学を担う」若手の育成や　関連領域との広い連携も図りたいと思います。　一般演題はもちろん、たくさんのシンポジウムやワークショップなども募集します。

会場の獨協医科大学がある栃木県壬生町は、風光明媚で風通しが良く、社会医学を議論するのに最適なところです。敷地内には立派なホテルも新しく完成しました。カクテルと餃子の街宇都宮での熱い意見交換会、日光・足尾銅山ツアーも皆様をお待ちしております。

2018 年の初夏の栃木が皆様に取りまして素晴らしい思い出となりますように、また今回の総会での胎動が 30 年後、50 年後の「社会の健康」に少しでも貢献出来ますようにとの思いを込めて、スタッフ一同、一期一会の精神で努めます。皆様どうぞ奮ってのご参加をよろしくお願い申し上げます。

【プログラム（案）】 7 月 21 日（土）

特別講演「社会医学と医療概論」
千代豪昭
（クリムフ夫律子マタニティクリニック）

教育講演 1「楽しい疫学」（仮題）
中村好一
（自治医大 地域医療学センター 公衆衛生学）

特別ランチョンセミナー
山田真（八王子診療所）

上畑鉄之丞先生記念シンポジウム
「過労死予防からディーセントワークへ」
毛利一平（ひらの亀戸ひまわり診療所）
杉澤誠祐（（株）ブリヂストン那須診療所）
瀬尾恵美子
（筑波大学附属病院 総合臨床教育センター）
齋藤光江（順天堂大学 乳腺内分泌外科）
天笠崇（代々木病院）

シンポジウム 1「リプロダクションとライフサイクルの社会医学」（仮題）
座長は小橋元（獨協医科大学）で、
4 名のシンポジストを予定

シンポジウム 2「災害・事故への対応から学ぶ」
尾島俊之（浜松医科大学 健康社会医学）
緒方剛　（茨城県土浦保健所）
洙田靖夫（なめだリハビリテクリニック）
田村昭彦（九州社会医学研究所）

シンポジウム 3「国際的視野の社会医学」
杉下智彦（東京女子医科大学国際環境・熱帯医学）
冨田茂　（高田馬場さくらクリニック）
沢田高志（港町診療所）
田巻松雄（宇都宮大学 国際学部 国際社会学科）

7 月 22 日（日）

教育講演 2「社会医学とアドボガシー」（仮題）
神馬征峰（東京大学 国際地域保健学教室）

シンポジウム 4「社会医学課題へ切り込む疫学」
近藤克則（千葉大学 予防医学センター）
鈴木貞夫（名古屋市立大学 公衆衛生学分野）
遠藤源樹（順天堂大学 公衆衛生学講座）
大平哲也（福島県立医科大学 疫学講座）
藤原佳典（東京都健康長寿医療センター）

シンポジウム５「次代の社会医学を考える」

北原照代（滋賀医科大学社会医学講座衛生学）
八谷　寛（藤田保健衛生大学公衆衛生学講座）
田中　勤（少年支援保健委員会・Public Health）

【足尾銅山ツアー】

大会二日目に、足尾の今と歴史を辿るバスでのツアーを行います。学会参加と一緒にお申し込みください。

【情報交換交流会】

宇都宮市内の東武ホテルグランデで行います。

【各種締め切り日】

演題発表および事前参加の〆切

2018 年 4 月 13 日（金）

抄録提出〆切

2018 年 4 月 30 日（月）

【宿泊】

総会事務局として宿泊の斡旋は行っておりません。各自でご予約ください。

・東武ホテルグランデ（情報交換・交流会会場）
https://www.tobuhotel.co.jp/utsunomiya/
所在地：栃木県宇都宮市本町 5-12
電話番号：028-627-0111

・ホスピタルイン獨協医科大学
https://www.hospital-inn.com/
所在地：栃木県下都賀郡壬生町北小林 1075-18
電話番号：0282-85-1551

第 59 回 日本社会医学会総会 事務局
獨協医科大学 公衆衛生学講座内
〒321-0293
栃木県下都賀郡壬生町北小林 880
TEL　0282-87-2133,　FAX　0282-86-2935
E-mail: pubhealth@dokkyoumed.ac.jp
総会ホームページ：
https://socmed59th.wixsite.com/soc59

投稿　私と「社会医学」

理事　垰田和史

私は大学を出て 4 年間、市中病院で呼吸器内科医として診療に従事しました。その間に関わった一般健診で、頸肩部や上肢の痛みで日常生活に支障をきたしている患者（頸肩腕障害患者）に出会います。臨床医として何の対応もできなかったことを機に、労働衛生の基礎を学ぶ目的で大学院生となりました。大学院生 2 年の時に、手話通訳者の頸肩腕障害患者と出会います。当時、滋賀県には専任の手話通訳者は 1 人しかいませんでした。その手話通訳者が極めて重度の頸肩腕障害を発症していました。手話通訳者での頸肩腕障害の発生報告は国内外にありませんでした。手話通訳者の存在や役割はおろか、手話についての知識も皆無だったので、手話通訳者の心身の負担や、手話通訳者の働き方について関係者からの聞き取りを重ねていきました。手話通訳者の職場のパートナーであった聴覚障害者や滋賀県下の聴覚障害者からも、手話通訳者を介した聞き取りを重ねました。

研究室でのゼミで、表面筋電図や運動学的手法による検討結果を根拠に、手話動作が頸肩腕障害の原因となり得ると報告しました。しかし、当時の指導者であった渡部眞也教授からは、検討の不十分さを指摘されました。手話動作に相当の筋負荷があったとしても、休憩すれば、無理しなければ、頸肩腕障害は発生しないと言うのです。なぜ、倒れるまで手話通訳をし続けたのか。なぜ、滋賀県には専任の手話通訳者が 1 人しかいないのか。手話通訳者がいない状況下では聴覚障害者の生活はどのような状態におかれるのか。について、考えることになりました。たどり着いたのは、聴覚障害者がコミュニケーションや情報から閉ざされた社会に放置されていることに端を発して、手話通訳者が頸肩腕障害を発症するとの、社会的な要因を踏まえた、手話通訳者の健康障害発生の構図でした。臨床医時代には見えなかった、患者の健康障害の背景でした。こうした観点から事例をまとめ、1989 年に社会医学研究会（本学会の前身）で報告しました。手話通訳者の職業病に関する発表なのに、社会保障問題の大家である坂寄先生が「始めて知る事実」として評価してくださいました。

1991 年には、疫学調査を通じて、全国に健康を害した手話通訳者が数多くいることを把握していました。重症な頸肩腕障害には即効性のある治療方法がなく予防が重要な課題となります。しかし、手話通訳者を通じて始めて社会参加を遂げだした聴覚障害者にとって、手話通訳者の健康を守るために、手話通訳者の利用制限が受け入れられるだろうか。手話通訳者の健康を害しない、科学的根拠のある手話通訳ルールの提案を誰がすべきか。など、大学院の修了を控えて、将来の専門家としての進路に迷っていました。

そんな 1991 年に、「再び社会医学とは何かを考える」と題したシンポジウムの座長を、渡部教授とともに担当しました。シンポジストは、社会医学研究会の大先輩である、保健師、衛生学者、保健所長、労働衛生研究者でした。専門とする分野は異なるが、4 人の発表に共通していたのは、生活や労働の場に発生している事実を出発点に、その健康に係わる事象を科学的に多面的に把握・分析し、その発生構造を対策に結びつけてきた歩みでした。健康や生活を脅かされる国民と多様な専門家との共同によって、疾病の予防や生活の改善を実現させる「社会医学」の可能性を強く感じました。

このシンポジウムを経て、社会医学の専門家として、手話通訳者の健康問題の解決に取り組む決意をし、現在に至る道に踏み出すことができました。